

檜枝岐歌舞伎

千葉之家花駒座 演目ダイジェスト

「一之谷嫩軍記」三段目「熊谷陣屋の段」



2022年8月18日、檜枝岐村の鎮守神祭礼奉納歌舞伎で、「一之谷嫩（ふたば）軍記 熊谷陣屋の段」が千葉之家花駒座により上演された。東国武士の熊谷次郎直実（なおざね）が一ノ谷の戦いを経て出家するまでの物語だ。

（直実は、浄土宗の宗祖、法然の弟子となり、蓮生の名で後半生を生きただこと知られる。）

源平合戦の時代、「一ノ谷の戦い」で、熊谷直実が我が子ほどに年若い平敦盛（たいらのあつもり）の首を、苦渋の末に討ち取ったことが『平家物語』に語られている。

そのストーリーを江戸中期に並木宗輔が脚色し、宗輔没後に完成されたのが「一之谷嫩（ふたば）軍記」だ。檜枝岐歌舞伎の「熊谷陣屋の段」では、平敦盛を討った熊谷直実の陣屋に、妻の相模が息子の小次郎の身を案じて訪ねてきた所から始まる。

首実検にそなえるために陣屋に戻った直実に、直実と相模のかつての恩人で、敦盛の母である藤の方が、息子のかたきを討とうと斬りかかる。直実は藤の方を押しとどめ、戦の場でやむをえなかったと言い、その時の状況を「さてもさんぬる六日の夜」と語り出す。

首実検で直実が義経に差し出す首を見て驚いたのは相模だ。その首は敦盛ではなく、我が子小次郎のものだった。

物語の要所要所に、「一枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札が示される。桜の若木について書かれたこの文言には、「後白河法皇の落胤である敦盛を助けよ」という義経の指令が暗示されていた。

そこに来合わせた石屋の弥陀六は、かつて幼かった義経の命を救った弥平兵衛宗清であった。弥陀六は戦死した人たちを弔うために、諸国を歩いて石塔を建てていたが、義経に素性を見破られ、「あの時に助けなければ、平家は今も栄えていた」と悔しがる。義経は弥陀六に鎧櫃を持たせる。そこには、直実が命を救った敦盛が隠されていた。



変わり果てた我が子の首を抱き、悲嘆にくれる相模。

「一枝を切らば一指を切るべし」の制札どおり、敦盛の首を討ったと義経に語り、直実は首実検で首を最出す。実は、その首は、敦盛と見せかけるために斬ったわが子・小次郎の首だった。

直実は人の世の無常を思い、出家する。自らの手で若き命を奪わなければならなかった息子を思い、「十六年はひと昔、夢だ夢だ」と顔をゆがめながら、髻（もとどり）を切って出家した直実は、息子小次郎と戦死者の霊を弔う旅に出る。



敦盛が隠された鎧櫃を背負い、制札を手にする弥陀六。

敦盛の身代わりとして、一子、小次郎の首を斬らねばならなかった熊谷直実と、その妻、相模の悲愴極まる迫真の演技に心打たれる見応えのある演目だ。